

## *The Duchess of Malfi*

### — その構成の手法について\* —

英文学教室      岡      村      俊      明

Duchess of Malfi の扱い方については、作者 John Webster の態度は矛盾、無秩序である、と考える批評家がいる<sup>(1)</sup>。確かに無秩序に思われる個所がある。

そこで Duchess に焦点をあてて、この劇から矛盾すると思われる要素を取り出し、次のように整理してみた。Ferdinand, Cardinal はもちろん、第三者と思われる人からも、Duchess は自堕落な女、あるいは“strumpet”と考えられていた。それに反して、Duchess 自身は、自分の再婚にやましいところはなく、再婚した今も自分の評判は汚されていないと言う。両者の考えは、妥協点を見出すこともなく平行状態のまま続く。そして Duchess の殺害という時点に達する。すると彼女は“virtue itself”と考えられてくる。Ferdinand などの考えは、突然に変化する。彼女をとがめた第三者的な人の考えも消えてくる<sup>(2)</sup>。また彼女に対して考えを変えるわけであるが、彼等には葛藤があったかという点、表面上は全然そうでない。変わるべき伏線はないように思われる。常識的に言えば、この劇の構成は矛盾しているといえる。しかし作者は一見矛盾と思われる要素を打ち消す、あるいは劇の進行を効果的にする方法を、この劇に導入しているのではないだろうか。この論文で考察したいのはこのことである。

まずこの劇の登場人物を三つのグループ——第三者的な目で見ていると思われる人々、Duchess と彼女を取り巻く人々、Ferdinand と彼を取り巻く人々——に分けて考えてみたい。

ではまず第三者の目にうつる Duchess はどのような人柄なのだろうか。身分の高い未亡人がその家令と結婚するが、この結婚は彼等にどう考えられていたのだろうか。Duchess に好意を寄せている忠実な召使 Cariola は次のように考える。

Whether the spirit of greatness or of woman  
Reign most in her, I know not, but it shows  
A fearful madness: I owe her much of pity. (I. i. 512-4)<sup>(3)</sup>

完全に第三者と思われる人も、彼等の結婚の不釣合に驚いている。

\* この論文は第24回日本英文学会中国四国支部大会（46年10月23日）において発表された。

(1) Clifford Leech, *John Webster: A Critical Study* (New York: Haskell House, 1966), pp. 78-9.

(2) Duchess の自分自身の評価については、始めと終りには変化がない。

(3) テキストは A. K. McIlwraith (ed.), *Five Stuart Tragedies* (London, Oxford Univ. Press, 1953) である。

I *Pil.* Here's a strange turn of state! who would have thought  
 So great a lady would have match'd herself  
 Unto so mean a person! yet the cardinal  
 Bears himself much too cruel. (III. iv. 23-6)

Antonio の親友である Delio は, Antonio が公爵夫人と結婚するのは, 異常だと考え, その凶事を予想して, 次のように述べる。

I do fear  
 Antonio is betray'd: how fearfully  
 Shows his ambition now! unfortunate fortune!  
 They pass through whirl-pools, and deep woes do shun  
 Who the event weigh, ere the action's done. (II. iv. 79-83)

では身分の低い人と結婚した彼女の評判はどのようなのだろうか。巡礼は彼女の “looseness” について言及している。また一般民衆は, 彼女の夫である Antonio の口を借れば

The common rabble do directly say  
 She is a strumpet. (III. i. 25-6)

である。そして Webster がこの劇を書くために用いた原典である Painter の *The House of Pleasure* では, Duchess の淫蕩さが描かれている。Antonio をながめる目も “wanton and lurking” であった。<sup>(1)</sup> また夜一人で寝るのがとてもいやであったこと, そして結婚したが, その結婚は “a mask to hide hir follies and shamelesse lusts”<sup>(2)</sup> である。これは, ここで第三者の目を通してながめられている彼女の姿と, ほぼ一致している, といえよう。

次には Duchess と彼女を取り巻く人々は彼女をどう見ているかを考察しよう。やがて彼女の夫となるべき Antonio が劇の始めに述べる。

in that look  
 There speaketh so divine a continence  
 As cuts off all lascivious and vain hope.  
 Her days are practis'd in such noble virtue. (I. i. 207-210)

こうごうしい彼女について描かれている。

では結婚についての彼女自身の考えはどのようなのだろうか。Duchess は次のように述べる。

(1) Gunnar Boklund, *The Duchess of Malfi: Sources, Themes, Characters* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1962), p. 17.

(2) *Ibid.* ,p. 17.



世間の人には、彼女を“strumpet”とさえ考えるのがあるが、彼女は自分は全然やましいところがないと思っている。どんなにとがめられても、“my reputation is safe”と答える。彼女ははっきりした主義主張をもっているからである。我々が注意すべきことは、Webster は Duchess の結婚から、完全に彼女の“lust”を排除していることである。人間とは“alabaster”ではないこと、また束縛を断ち切って結婚する基本的権利があること、また古い慣習などに縛りつけられて人を選ぶのではなく、その人の価値によって選ぶということである。原典では Duchess の淫蕩で清純な両面が、公平な目で描かれていたのが、Webster はこの作品で彼女の“lust”を注意深く排除して、結婚に対しては明確なる一つの主義主張をもった女性として考えている。

では Ferdinand や Cardinal はどのように考えているのだろうか。彼等二人は Bosola を使って妹を殺すことになるのだが、どうして殺さなければならなかったのだろうか。

まず Ferdinand について。彼の使ったイメージを調べてみると、妹に対する性的連想が実に多いことがわかる。Duchess は世人の目にも、“lust”に生きる女、または“strumpet”に映ることは既に述べたが、彼のイメージははるかにそれを越えている。妹と話しながら、次のようなことを言う。

And women like that part which, like the lamprey,  
Hath ne'er a bone in't. (I. i. 343-4)

彼女が結婚したことを知ったときには、彼女は誰かと性的関係をもっているのではないか、そういうことが拡大化されて、彼の頭の中に猛烈な力で突入してくる。

*Ferd.* Methinks I see her laughing,—  
Excellent hyena! Talk to me somewhat, quickly,  
Or my imagination will carry me  
To see her in the shameful act of sin.  
*Card.* With whom?  
*Ferd.* Happily with some strong-thigh'd bargeman,  
Or one o'th'wood-yard that can quoit the sledge,  
Or toss the bar, or else some lovely squire  
That carries coals up to her privy lodgings. (II. v. 38-46)

Cardinal は弟の異常さに対して、何度も“Speak lower”とか、“Is't possible”とか、“Why do you make yourself/So wild a tempest.”とか、“You fly beyond your reason”とか、とがめねばならなかった。同じように妹に対して殺害者となる二人の兄弟の反応の相違は注目に値する。Cardinal にとってさえ、Ferdinand の行為は“deformed,”“beastly”に思われた。ここでの Ferdinand の態度は、寡婦の再婚の倫理性について考えているそれとは、ほど遠いことに注意しなければいけない。

Cardinal はどうだろうか。一幕一場では Ferdinand とともに、結婚は絶対にするなど、陰しく言っている。彼は個人的にも、その良心に照しても、彼女をとがめる資格があるのだろうか。聖職にありながら、彼には情婦 Julia がいる。彼女には Castruchio という夫がいる。Julia は Castruchio から Cardinal へ、後に Bosola へ愛情を移す。彼女は“lust”のみで生きている女として描かれている。Julia と彼女を取り巻く人々の話は、Painter の sourceにはなかった。Webster が作り出した plot である。その原典では、“lust”を追いかける Duchess であったのに反して、この劇では人間性の要求に基づく、強い愛の Duchess に変えられている。一方この劇には“lust”のみを追い求める Julia が登場し、Duchess と対比させられている。それによって、情欲のために再婚したのではない Duchess の愛が強められているといえよう。<sup>(1)</sup>

三つのグループの人々の考えや心理をたどってきたが、以上のことから言えることは、Duchess の殺害に至るまで、Ferdinand は良心の痛みを吐露しているところは一度もない、また Duchess も自分が心やましいという意識もない。Shakespeare の劇ではそうであるが、ある登場人物が改心するときは (miner characters は別として)、それ以前に良心の呵責のために苦しんで吐く科白を言わせている。変化に対しては、十分な伏線を準備しているといえる。Webster の他の作品 *The White Devil* においては、常識的な意味で、構成の均衡がある。女主人公 Vittoria は終始一貫して“devil”または“strumpet”と考えられている。また彼女は最後に、自分の罪を認めそのあがないのために死ぬのだと言う。次の通りである。

O my greatest sin lay in my blood  
Now my blood pays for't. (V. iv. 240-1)<sup>(2)</sup>

*The Duchess of Malfi* では良心の痛みを吐いた言葉は全然ないといえる。しかも Ferdinand は改心する。しかしよく注意して見れば、Webster は独特な仕方では、伏線を用意していることがわかる。Ferdinand の怒りについては述べたが、それは同じ当事者である兄の Cardinal できさ、*“out of reason”* などの言葉を再三言い、彼の異常さをたしなめるほどであった。それと反対に Duchess は自分が *innocence* と信じて疑わない。彼女は新しい *order* を信じている人として、“lust”を極力排除して描かれている。こういう両者を描くことによって、Webster は彼女に対して好感を抱いていない観客 (第三者的な人々<sup>(3)</sup>) に衝撃を与えて、Duchess の方へ同情を向けさせるきっかけを与える。彼に起る Ferdinand の変化を不自然なく受け入れる素地を与える。Ferdinand や Cardinal が異常であればあるほど、また Duchess が誠実な生き方をしてい

(1) 後半になるに従って、その parallel が明白になる。Leech は次のように述べている。“There is even a strange parallel between the wooing-scene, where the Duchess hides Cariola behind the arras and then launches into the declaration of her love, and the scene in V.ii where Julia, the rank whore, proclaims her passion for Bosola and then hides him in her cabinet while she extorts a confession of guilt from the Cardinal: in both cases, a woman's frank avowal; in both, a hidden witness; in both, a woman's triumph leading to her destruction.” (Leech, p. 75)

(2) テキストは C. B. Wheeler (ed.) , *Six Plays by Contemporaries of Shakespeare* (London, Oxford Univ. Press, 1952).

(3) なお、彼女の死後第三者的な人の口をかりて、彼女を淫売だということとはなくなる。

ればいるほど、Duchessの方へ同情を向けているといえる。寡婦が身分の下の者と再婚することはいいことか、悪いことかということについては、Websterは両者それぞれに独自の考えをもたせている。しかし両者の論議がかみ合い、一方が他方を論理的に説得させ、変化させるという、常識的なplotはこの劇にはない。そのかわり感情的要素が介在して、その論理を別な方向に変化させる伏線を作っている。外面的な論理は両者平行のまゝで、しかし感情的には同情をDuchessの方へ向けているといえる。伏線の効果は論理ではなくて、こういう感情(FerdinandやCardinalの異常さ)であるといえよう。

ついにFerdinandもDuchessを“heavenly”と考えるに到るが、それにはもう一つの事件が必要である。それはDuchessの殺害の場面である。これは長く、かつ入念に描かれている。

Duchessは死を予想してAntonioを逃してやるが、そこから彼女が殺されるまでは545行もある。三場にまたがる随分長いものである。Ferdinandは殺す前に彼女を苦しめる。彼女の夫の腕と言って、暗闇で死人の腕をつかませる。その次は彼女のところに狂人を放す。奇妙な歌を歌い、踊り狂う。Bosolaできえ、“go no further in your cruelty”ときとす。

一方Duchessのほうは死が近づいてくると、一層気高くなってゆく。Bosolaがそれを描写している。

Nobly: I'll describe her:

She's sad, as one long us'd to't: and she seems  
Rather to welcome the end of misery  
Than shun it; a behaviour so noble  
As gives a majesty to adversity:  
You may discern the shape of loveliness  
More perfect in her tears than in her smiles:  
She will muse for hours together; and her silence,  
Methinks, expresseth more than if she spake. (IV. i. 2-10)

彼女は以前に、

Men oft are valu'd high, when th'are most wretched. (III. v. 139)

と述べたが、まさしく苦悩の極みに立って、彼女の真価が発揮されてくる。気高く美しく描かれているが、我々に哀れみを起させる姿でもある。召使のCariolaが引き裂かれようとする、彼女に対して、

I pray thee, look thou giv'st my little boy  
Some syrup for his cold, and let the girl  
Say her prayers ere she sleep. (IV. ii. 205-7)

と言う。また執行人に対しては次のように言う。

Pull, and pull strongly, for your able strength  
Must pull down heaven upon me—  
Yet stay; heaven-gates are not so highly arch'd  
As princes' palaces; they that enter there  
Must go upon their knees—Come, violent death,  
Serve for mandragora to make me sleep!—  
Go tell my brothers, when I am laid out,  
They then may feed in quiet. (IV. ii. 233-40)

一度死んだと思われていた Duchess が息を吹き返し、夫の名を呼び、“Mercy”と言って死ぬ。<sup>(1)</sup>彼女の死を頂点とする場面は、我々の感情をかき立てる要素が多くある。そして“pity,” “sad,” “mercy”などの言葉が多く使われている。Duchess は自分は次のものになると言う。

I shall shortly grow one  
Of the miracles of *pity*.<sup>(2)</sup> (IV. i. 94-5)

こうごうしいまでの彼女が描かれている。

既述したように Bosola も Ferdinand の残酷さをとがめて、彼女に同情を持つようになる。Ferdinand は必死にそれを食い止めようとする。

Thy *pity* is nothing of kin to thee. (IV. i. 134)

断固として彼女に哀れみを感じまいと思っていた Ferdinand も彼女の死顔を見て変化しはじめる。Bosola もそれに気づく (“here begin your *pity*.” IV. ii. 260)。彼女の子供の死を見ても Ferdinand 頑張り通す。

The death  
Of young wolves is never to be *pitied*. (IV. ii. 261-2)

目を移して、もう一度彼女を見ると耐え切れなくなり、次の文句を吐く。

Let me see her face again,  
Why didst thou not *pity* her? What an excellent  
Honest man mightst thou have been,

(1) キリスト教的要素については次の本を参照。Peter B. Murray, *A Study of John Webster* (The Hague, Mouton, 1969), pp. 130 ff.

(2) イタリック体は筆者のもの。

If thou hadst borne her to some sanctuary!  
 Or, bold in a good cause, oppos'd thyself,  
 With thy advanced sword above thy head,  
 Between her *innocence* and my revenge! (IV. ii. 274-80)

今迄一度も口にしたことのない *innocence* という言葉がでてくる。“pity”と“innocence”が同時に彼の口から出てきたことに我々は注意を払わねばならない。

Bosola も Duchess の再生の直前に、

She's warm, she breathes—  
*Upon thy pale lips I will melt my heart,*  
 To store them with fresh colour.—Who's there!  
 Some cordial drink!—Alas! I dare not call:  
 So *pity* would destroy *pity*.—Her eye opes,  
 And heaven in it seems to ope, that late was shut,  
 To take me up to *mercy*. (IV. ii. 345-51)

と言う。“melt,” “pity,” “mercy”を使う彼の心理状態は想像できよう。そしてとうとう彼女がことぎれたのを見て、彼女の“innocence”が彼にも身にしみてわかった。

O sacred *innocence*, that sweetly sleeps  
 On turtle's feathers, whilst a guilty conscience  
 Is a black register, wherein is writ  
 All our good deeds and bad, a perspective  
 That shows us hell! That we cannot be suffer'd  
 To do good when we have a mind to it!  
 This is manly *sorrow*;  
 These *tears*, I am very certain, never grew  
 In my mother's milk. (IV. ii. 365-73)

彼の涙とともに、初めて彼女の *innocence* がわかるようになる。そして彼は Ferdinand を“tyrant”と呼ぶ。この後 Ferdinand のことは“tyrant”などのイメージを使ってたびたび呼ばれてくる。<sup>(1)</sup>そして Duchess は“heavenly”だと皆に思われてくる。

ここで注意すべきことは、Ferdinand は死に臨んでの彼女の姿の貴さに、堪えられず心を動かされて突然変わってしまったということである。その変化が突然であればあるほど、それをうずめる感情的要素が大きくないとすれば、それは矛盾、不自然な印象を我々に与えるものである。既に述べたように、Webster は伏線を含めて十分に感情的要素を導入しているといえよう。それほど

(1) Cf. IV. ii. 2, 61, 198 etc. 殺害の場面には登場しなかった Cardinal はあとで、地獄の責苦に悩まされ (V. v. 1-7), 悲惨な死に方をする。



この場面は感情的要素が多く、“pity”などの言葉を多用していることがわかる。この劇の大きな転換点も論理的なものではなく、感情的なものである。<sup>(1)</sup>

我々はこの劇の構成については、あくまで論理的にその矛盾を考突するのではなく、<sup>(2)</sup> 異常な論理のなかに隠された論理をみて、矛盾する諸点を演劇上の効果はどうであったかという観点から考察すれば、この感情の論理ともいべきものも理解できよう。

熟練した劇作家 Webster が観客の心理も十分にのみこんで、こういう効果を使ったものであると思われる。

---

(1) Webster のもう一つの代表作 *The White Devil* でも、彼女が死ぬ前後は、Cariola の有名な song をはじめとして、pityful な場面が多い。死に際しての人間の姿に作者は芸術的関心をもっているようである。主人公 Vittoria は過失を認めて平然として死を迎える。“white devil”と言われ、誰からも兄の Flamineo すらにもそう呼ばれていた (ex. V. vi. 241)。しかし彼も毅然として死にゆく Vittoria を見ては “Th’art a noble sister. I love thee now.” (V. vi. 249) と述べるようになる。

(2) 論理的構成の一つとしては、Julia の side plotを参照。

